

自著と
その周辺

ワシントンマニュアル外来編

メディカル・サイエンス・インターナショナル
1,136頁
2012年5月刊行
8,400円+税

少し古くなりましたが、編集委員の先生からお声をかけていただきましたので、拙訳書「ワシントンマニュアル外来編」を紹介させていただきます。

本書は The Washington Manual of Outpatient Internal Medicine の訳書です。「ワシントンマニュアル」は世界的に圧倒的な支持と評価を得ている内科系病棟マニュアルとして有名ですが、その姉妹編として初めて出版された外来マニュアルにあたります。

2009年に「セントとフランシスの総合外来診療ガイド」という、これまた総合内科外来診療を行う上でとても簡潔にまとめたマニュアル本を前任地の長野赤十字病院で翻訳出版させていただいたのですが、そのときの仕事を評価していただき、本書の原著が出版された時にメディカル・サイエンス・インターナショナル社から私たちのところに翻訳のオファーを頂いた次第です。

内容の紹介を致しますと、全45章の中には内科系症候・疾患はもちろんのこと、皮膚科、精神科、禁煙外来など、外来ならではの幅広い診療領域、症候、問題も含んでいます。当然「ワシントンマニュアル」と重複する分野もあるのですが、その記述は決して焼き直しではなく、外来ならではの視点が随所にみられます。いずれもエビデンスに基づいた記載、豊富な参考文献を備えており、図表も充実していることから、要点を把握しやすく記載されています。さらに本書から、ワシントンマニュアルシリーズは箇条書きとなりました。病棟診療以上にスピードを求められる外来診療においては、これらの「ワシントンマニュアル」のDNA ともいえる特徴が本家以上に効果的であると感じます。私自身、外勤先の外来には一冊置いておき、必要に応じて適宜参照しています。

本書の翻訳においては、私と長野赤十字病院総合診療科の金児先生、降旗先生らが中心となりました。しかし多くの章で同院の若手医師、臨床研修医が翻訳に携わりました。専門分野には同院の多くの指導医が関わって監修をしていただいています。本書には若手医師の自ら学ぶ姿勢が結実しているといっても過言ではなく、彼らのそんな情熱を形にできたことが感慨深く、また誇らしく思います。

余談となりますが、最後に、このような類の「マニュアル本」系書籍の今後について少し私見を述べさせていただきます。

かつてアインシュタインは「覚えていなければならないのは図書館の場所だけだ」と語ったそうです。人間の能力の中で記憶力よりも思考力を重視していた彼らしい言葉です。しかし IT 技術が発達したため、いまや図書館に足を運ぶ必要すらなく、ポケットの中のスマートフォンからあらゆる情報にアクセスできるようになりました。その代わりに求められているのは、あまたの情報から本当に必要なものを拾い上げられるようになったり、またそれを活用したりといった、いわゆる「21世紀型スキル」です。また、同じ情報にアクセスするにしても、英語の情報源をわざわざ日本語にしてからアクセスするタイムロスも気になります。

情報利用者の変化にあわせ、情報提供側も変化しなければなりません。出版業界が岐路に立たされていると叫ばれて久しいのですが、その中でも特に「紙のマニュアル本」はその存在意義を社会から問われているように思います。電子書籍化またはオンライン化してアクセシビリティを高めなければいけないのではないかと、著者の経験とナラティブを多分に含んだ（例えば、エビデンスは確かではないけれど実地でこうやっている、といった）記述にシフトしてはどうだろうか、等々…。

本書を訳出してから3年、その間に大学での医学教育に関わるようになった私としては、「マニュアル本の先にあるもの」についてももう少し考えていきたいと思っています。

(信州大学医学部医学教育研修センター 清水 郁夫)